

田原藤太

楠山正雄

青空文庫

むかし近江おうみの国くにに田原藤太たわらとうだという武士ぶしが住すんでいました。ある
 日藤太とうだが瀬田せたの唐橋からはしを渡わたって行きますと、橋はしの上に長ながさ二十丈じょう
 もあろうと思おもわれる大蛇おろちがとぐろをまいて、往來おうらいをふさいで寝ね
 ていました。二つの目玉めだまがみがき上げた鏡かがみを並ならべたようにきらき
 らかがやいて、劍つるぎを植うえたようなきばがつんつん生はえた間あいだから、
 赤あかい舌したがめらめら火はを吐はくように動うごいていました。あたり前まえの人
 なら、見みただけで目まを回まわしてしまふところでしょうが、藤太とうだは平へ
 気いきな顔かおをして、大蛇おろちの背中せなかの上うを踏ふんで歩あるいて行きました。しば

らく行くと、後ろでだしぬけに、

「もしもし。」

という声こえがしました。その時ときはじめてふり向むいてみますと、今いままでそこにとぐろをまいていた大蛇おろちは影かげも形かたちもなくなつて、青あおいきもの着物きを着た小さな男おとこが、しよんぼりそこに座すわつて、おじぎをしていました。

藤太とうだは不思議ふしぎそうにその男おとこの様子ようすをながめて、

「今いまわたしを呼よんだのはお前まえか。」

と聞ききました。小男こおとこはまたていねいに頭あたまを下さげて、

「はい、わたくしでございます。じつはぜひあなたにお願ねがいしたいことがございます。」

といいました。

「それは聞いてあげまいものでもないが、いったいお前は何者だ。」

「わたくしは長年この湖の中に住んでいる龍王でございます。」

「ふん、龍王。するとさつき橋の上に寝ていたのはお前かね。」

「へい。」

「それで用というのは。」

「それはこうでございます。いったいわたくしはもう二千年の昔からこの湖の中に住んで、何不足なく暮らしていたものでござ

います。それがいつごろからかあのそれ、あちらに見えます三みかみ上山やまに、大きなむかでが来て住むようになりました。それがこのごろになつて、この湖みずうみを時々ときどき荒らしにまいりまして、そのたんにわたくしどもの子供こどもを一人ひとりずつさらつて行くのです。どうかして敵かたきを打ちたいと思おもいますが、何なに分ぶん向むこうは三上山みかみやまを七なな巻まき半はんも巻まくという大おおむかでのことことでございますから、よし向むかつて行いつても勝かつ見み込こみこがございませぬ。そうかといつて、このまま捨すてておけば子供こどもは残のこらず、わたくしまでもむかでに取とられて、この湖みずうみの中に生いきもの種たねが尽つきてしまふでしょう。こうなると、もうなんでも強つよい人ひとに加勢かせいを頼たのむよりしかたがないと思おもひまして、この間あいだから橋はしの上うへに寝ねて待まっていたのでございませぬ。け

れどもみんなわたくしの姿すがたを見ただけで逃にげて行つてしまうので
 ございます。これでは世よの中にほんとうに強つよい人というものはな
 いものかと、じつはがっかりしておりました。それがただ今いまあな
 たにお目にかかることができ、こんなうれしいことはござい
 ません。どうかわたくしたちのために、あのむかでを退治たいじしては
 頂いたけますまいか。」

こういつて龍りゅうおう王おうはていねいに頭あたまを下げました。藤太とうたはやさ
 しい、情なさけぶかい武士ぶしでしたから、
 「それはどうも氣きの毒どくなことだ。ではさつそく行つて、そのむか
 でを退治たいじしてあげよう。」

といたしました。龍りゅうおう王おうはたいそうよろこんで、

「では御案内をいたしましょう。どうかごくろうでも、湖の底の私の住まいまでお越し下さいまし。」

こういいながら橋の下に降りて、波を切つて湖の中に入つて行きました。藤太もその後からついて行きました。しばらくすると向こうにりっぱな門が見えて、その奥に金銀でふいた御殿の屋根があらわれました。るりをしきつめた道をとおつて、さんごで飾つた玄関を入れて、めのうで堅めた廊下を伝わつて、奥の奥の大広間へとおりました。そのすいしようをはりつめた欄干から、湖水を透かしてすぐ向こうに三上山がそびえていました。

「むかでの出ますにはまだ間がございます。」

と龍王りゆうおうはいつて、藤太とうだをくつろがせ、いろいろとごちそうをして、いるうちに時刻じこくがたつて、だんだん暗くらくなつて来きました。

二

すると暗くらくなるに従したがつて、龍王りゆうおうの顔かおが青あおくなつて来きました。

「ああ、もうそろそろむかでがやつてまいります。」

と龍王りゆうおうは息いきをはずませながらささやきました。藤太とうだは弓矢ゆみやを持つて立たち上あがりました。

やがてむこうの空そらがかつと燃もえるように赤あかくなりました。すると間まもなく比良ひらの峰みねから三上みかみやま山やまにかけて何千なんという火ひの玉たまが現あらわ

れ、それがたい松行まつぎょう列れつのように、だんだんとこちらに向むかつて進すすんで来きました。

「あれあれ、あのとおりむかでがやってまいります。どうぞはやく退治たいじて下くださいまし。」

と龍りゆう王おうはぶるぶるふるえながらいいました。しかし藤太とうたはゆつたりした声こゑで、

「きつと退治たいじてあげるから、安あん心しんしておいでなさい。」

といいながら、欄干らんかんに片足かたあしをかけて一の矢やをつがえて、一ぱいに引ひきしぼって、切きつて放はなしました。矢やはまさしくむかでのみけんに当あたりました。けれどもかんと鉄板てついたにぶつかつたようおとな音おとがして、矢やははねかえつて来きました。藤太とうたは、

「しまった。」

と叫んで、手早く二の矢をつがえて、いつそう強く引きしぼつて放しましたが、これもはねかえつて来ました。もうあとに矢は一本しか残つてはおりません。むかでははずんずん近寄つて来ました。龍王はがっかりして死んだようになっていました。

その時藤太はふと思いついたことがあつて、三本めの矢の根を口にくくんで、つばでぬらしました。そして弓につがえて、ひよと放しますと、こんどこそ矢はぐつさりむかでのみけんにささりました。人間のつばをむかでがきらうということを藤太はふと思ひ出したのでした。

すると何千とない火の玉は一度にふつと消えました。大あらし

が吹ふいて、雷かみなりが鳴り出だしました。龍りゅうおう王おうも家来けらいたちも、頭あたまを抱かえて床ゆかの上かにつつ伏ふしてしまいました。

さんざん大荒おおあれに荒あれた後あとで、ふいとまた雷かみなりがやんで、あらしがしずまって、夏なつの夜よがしらしらと明あけかかりました。三上山みかみやまがやさしい紫むらさきいろの色いろの影かげを空そらにうかべていました。その下みづうみの湖うみにむかでの死骸しがいはゆらゆらと波なみにゆられていました。

龍りゅうおう王おうは小踊こおどりをしてよろこんで、

「お陰かげさまで今夜こんやからおだやかな夢ゆめがみられます。ほんとうにありがとうございます。」

といつて、何遍なんべんも何遍なんべんも藤太とうだにお礼れいをいきました。そしてたくさんごちそうをして、女おんなたちに歌うたを歌うたわせたり舞まいを舞まわせた

りしました。

「ごちそうがすむと、藤太はいとまごいをして帰りかけました。

龍王はいろいろに引き止めましたが、藤太はぜひ帰るといつてきかないものですから、龍王は残念がつて、

「ではつまらない物でございますが、これをお礼のおしるしにお持ち帰り下さいまし。」

といいました。そして家来にいいつけて、奥から米一俵と、絹一疋と、釣り鐘を一つ出させて、それを藤太に贈りました。そしてこの土産の品を家来に担がせて、龍王は瀬田の橋の下まで見送つて行きました。

藤太が龍王からもらった品は、どれもこれも不思議なもの

ばかりでした。米俵こめだわらはいくらお米こめを出だしてもあとからあとか
らふえて、空からになることがありませんでした。絹きぬはいくら裁たつて
も裁たつても減へりません。釣つり鐘かねはたたくと近江おうみの国くに中じゆうに聞き
えるほどの高たかい音おとをたてました。藤太とうだは釣つり鐘かねを三井寺みいでらに納おさめて、
あとの二ふた品しなを家いえにつたえていつまでも豊ゆたかに暮くらしました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田原藤太

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>